

一粒の麦 ニュースレター

特別版



東京カトリック神学院

さいたま教区の司祭召命のため、お祈りをお願いいたします

2023年9月

巻頭言

収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。(マタイ 9・37-38)

— 司祭召命のための祈り —

カトリックさいたま教区 司教 マリオ 山野内 倫昭

教会は長い歴史の中で、そのはじめの時から、このイエス様の招きを真剣に受け止めました。収穫の主に祈り、常に必要な働き手を畑に送ってくださるように。そしてこの働き手について話す時、叙階の秘跡によって司祭職を受けとった人たちについて強調してきました。

叙階の秘跡において、彼らがもう一人のキリストになり、その名によって教会の秘跡を授けます。そしてそれぞれの司祭が、遣わされた共同体のための羊飼いとなるのです。

主は、今日も呼びかけ続け、それに答えがあります。

教区の四つの県、埼玉、群馬、茨城と栃木の共同体を訪問しますと、私たちの小教区や町が、教会に奉献者の召命を提供してきたことに驚きます。修道女や修道士、さまざまな会の修道会司祭、そして日本の教区や他の国々で働いている教区司祭たちがいます。

何人かの司祭たちは、司祭召命を受けた場所が必ずしも出身の県や小教区ではなく、東京や他の都市や国であることに、私は注目します。多くの人たちは若い時に家族から離れ、大学などへ進学します。就職する時も故郷から離れたところに移ります。私が知っている司祭たちの中には、さいたま教区の出身であっても、司祭召命を感じたのは東京や他の場所であって、その教区で神学生として養成されました。大切なことは、私たちの小教区や共同体は、奉献生活者、修道者や司祭の召命を見出す場所であることです。その後、どこで働くかは主が考え、そこへ派遣されるのです。

全ての人が聖性に招かれています。特に司祭はその生活を通して、固有の聖性に招かれます。奉献生活や司祭職は主からのものであると、私たちは知っています。イエスが、最初の弟子たちのように彼らに呼びかけるのです(マタイ 10・1-4)。

皆さんもご存知のように、数世紀にわたって、聖性を生きた多くの人たちが列聖されています。カトリック聖人伝には毎日数人の聖人の記念があることが分かります。彼らの多くは司祭、奉献生活者、修道者です。確かに、信徒の聖人も数多くいます。聖人伝を探し続ければ、知らなかった聖人たちを発見することができます。私たちのうち誰かも、死後にそこへ入るかもしれません。

さいたま教区の状況

現在、私たちの教区では教区司祭の召命として、1人も神学生がいませんので、皆さんの特別のお祈りが必要です。しかし、宣教者になりたい、修道者として他の国へ行きたいと希望する青年たちはいます。共同生活を送りながら教育や医療を学び、疎外されている人たち、社会の弱い立場の人たちのために生きていきたい若者がいます。

東京には司祭になりたい人たちを養成する神学校があります。召命委員会に紹介された若者たちは、神学生たちと共同生活の体験をし、そこで自分の生き方が司祭として相応しいかを確認します。最初の識別を乗り越え、神学生になるための1年間の準備期間があり、その後2年間の哲学科を始めます。そして4年間神学を学び、最後の段階で助祭として叙階の秘跡を受け、関東地区のある地域の小教区、あるいは司祭叙階を受けるまで自分の教区で、少なくとも6カ月間の養成が必要です。

司祭叙階をもって初期養成が終わり、死ぬまで生涯養成の段階に入ります。そこから、司祭叙階を受けた者としての新しい人生が始まるのです。各々の司教から、さまざまな小教区で働くために派遣されます。信者は、この司祭を祈りをもって支え、協力して同伴することが大切です。多くの小教区で行われているように、日曜日のミサで祈り、ロザリオをささげ、あるいは聖体礼拝をもって、です。全ての司祭が、司祭としての奉仕、さまざまな課題や試練に直面することによって内的に清められていきます。霊的体験、司牧的体験を通して司祭たちは成熟していきます。師であるイエスに似たものとなるように。

司祭召命のために、新たに努力して祈るように

この長いパンデミック、霊的砂漠の期間の後、心を合わせて司祭召命のために祈りましょう。個人的に、そして家族として、平日、日曜日のミサに召命への意向を入れてください。そして特別に、ある日曜日、ある日のロザリオ、あるいは聖体礼拝、ミサで祈ってください。司祭たちが率先して、信徒のグループや侍者、あるいは若者たちを導くようにお願いします。もし、あなたの小教区に司祭や修道者がいるなら、この祈りの日に彼らを思い出してください。このような方々が家族に会うために生まれ育った場所を訪ねる時は、共同体のミサで紹介することを忘れないでください。

主に祈る

良い羊飼いの心を持った働き手、より多くの司祭を、主が送ってくださいますように。

信徒と共に、福音の種を惜しみなく蒔き、社会で最も貧しく困っている人のために仕える奉仕者を送ってくださるよう、主に祈りをささげましょう。

召命を求める祈り

「あなたがたがわたしを選んだのではない。
わたしがあなたがたを選んだ」(ヨハネ 15・16)
と仰せられた主よ、

使徒の心をもって、み国のために働く人を選び、
お送りください。

人々のために自分を捨ててキリストに従う人、
新しい天と地のために、清い心で聖母に倣う人、
福音を証しするために、十字架を担う人、
若者の救いのために主に倣う人、

悪は避けながらも、
悪人の救いに歩み寄る人、
ほほえみで周りを照らし、愛の心で皆を温める人、
神を信じ、人々に自分を開く人、
一粒の麦のように地に落ちて死に、
豊かな実を結ぶ人。

主よ、このような人々を数多く選び、
あなたの畑に遣わし、
主とともに働かせて下さい。アーメン。

Shomei o motomeru inori

Anata gata ga, watashi o eranda no de wa nai.
Watashi ga, anata gata o eranda (Jn. 15, 16)
to ōserareta Shu yo,

Shito no kokoro o motte mikuni no tame ni
hataraku hito o erabi,
ookuri kudasai.

Hitobito no tame ni jibun o sutete Kirisuto
ni shitagau hito,
atarashii ten to chi no tame ni, kiyoi kokoro
de Seibo ni narau hito,
fukuin o akashi suru tame ni, jujika o ninau
hito,
wakamono no sukui no tame ni Shu ni narau
hito,

aku wa shirizokenagara mo,
akunin no sukui ni ayumiyoru hito,
hohoemi de mawari o terashi, ai no kokoro de
minna o atatameru hito,
Kami o shinji, hitobito ni jibun o hiraku
hito,
hito tsubu no mugi no yōni chi ni ochite
shini,
yutakana mi o musubu hito.

Shu yo, kono yōna hitobito o kazu ōku erabi,
anata no hatake ni tsukawashi,

Shu to tomo ni hatarakasete kudasai. A-men

(今までの「一粒の麦の祈り」と共にお祈りください)



新司祭より皆様へ感謝をこめて

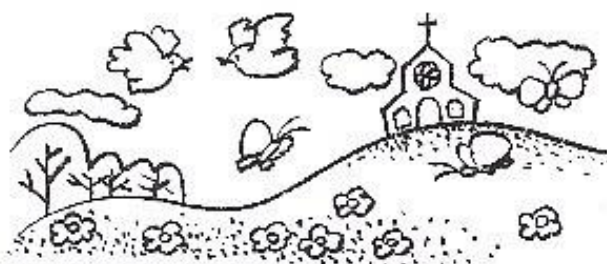
栃木県南ブロック ラファエル あんじんひょん 安鎮亨神父

神様の慈しみにより去年 5 月 30 日、カテドラルの浦和教会においてマリオ山野内倫昭司教様の司式で司祭叙階の恵みをいただきました。コロナの影響で、関係者と司祭団だけの叙階式になりましたが、父と母が韓国から特別ビザをもらって入国し、叙階式に参席できたのは今思い出しても奇跡的な出来事の一つでした。叙階の後、6 月から栃木県央・県北ブロックの協力司祭として松が峰教会での生活が始まり、初ミサなどいろいろな教会を訪れましたが、まだご挨拶できなかった教会の信者の皆様には心からお詫び申し上げます。

今年 4 月のさいたま教区第三次人事異動によって、栃木県央・県北ブロックの協力司祭を解き、栃木県南ブロックの足利教会の主任司祭、佐野・栃木教会の管理者に任命されました。叙階されてまだ一年も経ってない新司祭がいきなり三つの教会を担当することはあり得ないことですが、神様の助けを求めながら信者の皆様と協力し合うことを胸に抱いて、第一歩を踏み出しました。そんな中で、今年の世界青年の日(WYD リスボン大会)に参加するさいたま教区の青年たちに同伴することになり神様の大きな恵みを再び体験できました。

2019 年 WYD パナマ大会以後、コロナで延期になったリスボン大会がやっと今年 8 月に開会することになりました。さいたま教区の青年も日本の公式巡礼団に 6 名、他のグループで 2 名が今大会に参加されて新たな出会い、世界観の拡大、信仰心の深まり、その他いろいろな経験を得て日本に戻ってきました。世界各地の若者たちがどうして同じ場所に集まって、何をするのか、一体何を探し求めるのか、何を欲しがっているのか、もう青年ではない私にとっては疑問だらけでしたが答えは簡単でした。

神様の愛。これを求め、再確認し、励まされ、また宣言することでした。青年たちが探し求め、欲しがっていたのは海外にしかない、日本では手に入らないものではありませんでした。次の大会は 4 年後の韓国のソウルになります。WYD が一回限りのイベントではなく、自分の人生の旅路でターニングポイントになりますように、これからも同伴を続けたいと思います。どうか青年たちのために、特に彼らの召命のためにお祈りをお願い申し上げます。



養成担当者より

さいたま教区神学生養成担当 中嶋 義晃 神父

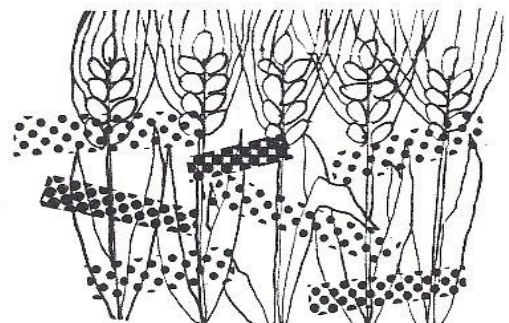
日本の教会には、教区司祭を養成する神学院が二カ所に設けられています。教区司祭養成の神学院は、福岡と東京にあり、九州と沖縄の 5 教区は福岡の神学院（福岡カトリック神学院）を、それ以外の大阪教会管区と東京教会管区の 11 教区は、東京の神学院（東京カトリック神学院）を運営しています。

東京の神学院の養成は、予科（1年ないし2年）から始まって、哲学を2年と神学を4年。その後助祭に叙階されて半年以上を経てから司祭に叙階されることになっています。以前は神学の三年目終了時の神学四年目に助祭に叙階されていましたが、現在の司祭養成は2016年に教皇庁聖職者省が示した司祭養成基本綱要「司祭召命のたまもの」に基づいて、生涯をかけての養成プログラムへと根本的に変えられました。

司祭は、司教の賢明な協力者、助け手として、福音をのべ伝え、信者を牧し、神の礼拝を挙げるために、叙階の秘跡によって聖別されます。特に、感謝の祭儀（ミサ）を司式することによってその務めを果たし、また、他の秘跡を通して、罪を悔やむ信者や病気の信者のためにゆるしと慰めを宣言します。教会が本来の使命を果たしていくためには、生涯を通して神の民に仕える司祭の存在が不可欠であり、すべての信者は神の恵みである司祭の召命のために祈り、その促進に努めるようまねかれています。

司祭にはその働きや所属に応じて修道会司祭、宣教会司祭、教区司祭等の区別がありますが、いずれにしても志願者は教会が定めた養成を受ける必要があります。さいたま教区では、教区司祭を目指し、神学生と認められた者は「東京カトリック神学院」で最低でも7年間の養成を受けなければなりません。また、各教区においては、神学生養成担当者の指導を受けながら、司祭叙階までの日々を過ごすことになります。

ところで、さいたま教区の現勢を15年前から5年ごとに見ていきますと次のようです。2008年、教区司祭19名、助祭8名、神学生8名。2013年、教区司祭25名、助祭8名、神学生2名。2018年、教区司祭23名、助祭5名、神学生2名。2023年、教区司祭22名、助祭5名、神学生0名。現在22名の教区司祭がありますが、小教区を担当している教区司祭は16名です。そして、神学生がおられませんので少なくとも今後7年間は、さいたま教区から司祭は叙階されない予定であるのが現状です。



先輩からの声

召命考

鈴木三蛙 神父

教区の神学生が0名。どうしてなのでしょう。何が足りないのかな？

やはり、祈りと言うべきでしょうか。

若者は、教会全体が召命のために祈っているのを聞いているうちに、心の中の神の呼びかけに気付くのではないのでしょうか。昔は皆さん、召命のためによく祈っていた。

でも祈り方は大切だ、私はそう思う。今頑張っている神学生の名前を挙げて、司祭になれますようにと教会が祈ったら、かなりのプレッシャーになる。少なくとも、私にとってはそうだった。個人的に「祈ってますよ」と言われるのはいいが、個人的な名前を出して教会の皆さんに祈られると、仮に召命がなかった時に、教会に顔を出しにくくなる。だから教会として祈るときには、個人のためではなく、教区司祭の誕生のために祈って欲しい・・・そう思う。

小生は召命に応える道を選んだが、召命がないと言われることをひそかに期待した。主が召されるなら応えたい、主の道具になりたいという思いと、召し出しがなければいいという相反する思いが、いつも交錯した。サレジオ会の志願院時代では、二人の友人と共に、昼食を終えると聖堂の横で聖母マリアの小聖務日祈禱を唱えたが、最後に「どうぞ召し出しがありませんように」と祈った。一人は修道会に入らず、のちに某大使館の通訳になり、もう一人は修道会に入り大神学生となったが、助祭になる前に修道会を去り税理士となった。

小生は修道会に入ったが、助祭となる段階で足踏みしていたので院長に面会しその理由を尋ねた。その時「修道会への召し出しがない」と言われた。小生は曇み込んで修道会への召し出しがないのか、司祭への召し出しがないのかを尋ねた。答えは「司祭への召し出しではない、修道会への召し出しがない」ということだった。そこで即修道会を退会し、郷里福島の所属する仙台教区への紹介状をいただき小林司教と面会した。司教は仙台教区に知っている教区司祭はいるかと聞いた。知りません、浦和教区なら2名知っていますと答えると司教は、それなら友人の長江司教を紹介したいと紹介状を下さった。長江司教は面接で「教区には余裕がない、自分で働いて生活できるか」と言われ、「仕事を見つめます」と言うので領いて受け入れて下さった。依頼、神学生の時は印刷店でアルバイトをし、司祭となって喫茶店、そしてセウイホームで仕事をしてきた。

「召し出しがないように」と言う小生の祈りは聞き届けられなかった。



信徒の方からの声

「バトンタッチ」

川口教会 押川彰

私の故郷は鹿児島県奄美です。数年前に亡くなった父は認知症が進行しながらも玄関から教会の入り口まで徒歩数をよく数えていました。175歩。近い！。川を挟んで目の前に教会があります。信徒会館には教会出身の司祭、シスター、修道者たちの写真がずらりと掲げられています。召命の多い教会でありました。毎日の教会での夕の祈りやロザリオの後には「召命」を求める祈りを唱えています。家族から司祭、シスター、修道者が生まれることは恵みであり名誉なことと喜んでいます。小中学生の頃、夏休みは神学生から侍者やラテン語を習ったり、シスターを目指す志願生と奄美にいる小中学生との文通も盛んでした。「召命」を近くに感じる環境でした。しかし司祭の減少は奄美でも同じで、現在はベトナムや韓国の司祭が数人司牧に携わっています。信徒会館にもここ数年新しい写真は飾られていません。

さいたま教区にも現在、神学生がいないと聞き戦後間もない生まれの世代の一人として少しですが責任のようなものを感じています。私たちの教会でも次世代へのバトンタッチがおこなわれませんでした。

「教会を重くしている利己主義な思いがあります。教会のために尽くしてきたのだから教会の重鎮にさせてもらってもいいだろうに。」「教会の重責は司祭だけで必要十分。教会の重鎮でありたいと思っている方々はそれを返上してください。」「教会の中で話し合いは必要ですが無駄な争いになる言葉は控えるようにしてください。」「子供や若い人たちを大切にしていける教会となってほしいものです。」「若い人々、多くの国々の人々が毛嫌いされないで集まれる教会を目指して下さい。」

20年前の教会報を読み返すと自責の念に駆られます。教会組織は崩壊し一度壊れた組織はなかなか復活せず、いまだに万全な体制ではありませんが現在、ベトナム人の青年たち、フィリピン人、洗礼を受けた日本人たちが積極的に教会活動に参加するようになり新たな風を感じています。

先月末、二日間に渡り開催された川口市の「たたら祭り」には例年「あかつき会」の名前で福祉コーナーに出店していたのですが、昨年からはベトナム人のマイコイグループが中心となり、今年は名称も「マイコイ川口」に変更致しました。変更の際、申請書に「若者支援、生活困窮者、ホームレスの方々の物心両面に渡る支援」と活動項目に記載されており教会のシスターたちとも協力して活動を実践しています。ベトナムの子供たちが何十人とミサの中で祝福をもらう姿は微笑ましく、ベトナム人の青年たちが聖歌隊を作り生き生きとミサに参加する姿は誇りにさえ感じます。言葉や行いで傷つけることなく、思いやりといたわりのある豊かな教会となることを希望し、それがまた新たな「召命の」土壌となることを望んでいます。

神学校の養成者から

さいたま教区の皆様へ

司祭への召出しについて ——自分の場合を振り返りながら——

東京カトリック神学院養成者兼教員
浅井太郎（名古屋教区司祭）

「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る」（マタイによる福音書 16 章 25 節）。私自身は 10 代の後半にこのイエス様の言葉に出会い、何となくその生き方がカッコいいなと思っているうちに、いつのまにかアウグスティヌスという人の本を読みだし、聖書を読みだし、結局、司祭にまでしていただきました。

イエス様との出会い、イエス様の言葉との出会いは、人それぞれでしょう。何か自分の中で響く声、動かす力に引っ張られて、あるいは引きずられて、イエス様に従う生き方に入り込んでゆきます。社会の中で色々なことが空しくなり、何か「これだ」と思えるものを探し出しているなら、イエス様が呼びかけているのかもしれませんが。「こちらに来なさい」、「来て、見なさい」と。

マタイによる福音書によれば、イエス様は十二使徒を選ばれる直前、飼い主のいない羊のような状態の群衆を見て、深く憐れみ、弟子たちに言われました。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい」（マタ 9:38）。そしてこの直後に弟子の中から 12 人を使徒として選び出しています。つまり特別な役務への召命の前提として、人々への深い憐れみがあり、その人々への奉仕のために召出しは行われるということです。では、「飼い主のいない羊」のような状態とはどんな状態なのでしょう。精神的な空白を抱え、何を一番大事にして生きていったらわからない状態ということではないでしょうか。現代の日本社会のいたるところに見られる虚構的なもの、空しさ、リアリティのなさ、そんなものに囚われた人々を深く憐れんだイエス様は、まことの生の充実を与えるために特別な奉仕者を求めておられます。

この文章をどなたが読んでおられるのでしょうか。どなたであれ、よりよく生きる基本は、イエス様がおっしゃっておられるように「求めなさい。そうすれば、与えられる」（マタ 7:7）です。本当に大事なものを積極的に求めましょう。そして、「働き手」への飢え渴きがまず私たちに与えられるよう願います。その時に初めて私たちは「働き手」を送ってくださる神様の御業を見ることになるでしょう。



感謝と報告

司教総代理 谷 国定 神父

さいたま教区の「一粒の麦」の発行は会員の皆様への神学生の現状報告ですが、司祭養成のための援助に繋がります。

「一粒の麦」の会員の皆様のご援助のおかげで、神学生たちは安心して神学校で勉強することができるのです。近年、さいたま教区の神学生がいないため、「一粒の麦」の会員数が大幅に減りました。2017年度の会員数は289名でしたが、2018年度140名、2019年度69名、2020年度46名、2021年度40名、2022年度には34名でした。

2022年、さいたま教区の司教座聖堂において、韓国から来られた安鎮亨助祭が司祭に叙階されました。現在、安神父は足利教会の主任司祭として派遣されています。彼は助祭になるまで、韓国の大邱教区で養成されましたが、助祭から司祭までの養成期間はさいたま教区と東京カトリック神学院で学ばれました。

ご存じのとおり、さいたま教区のために働いてくださった司祭を含め、教区高齢者の司祭は数名亡くなくなりました。さらに、現在、神学生の誕生も出ていません。それゆえ、司祭は少なくとも一人で二つの教会を担当しなければならない現状となっているのです。いくつかの小教区は司祭不在となっています。

大きな教会から小さな教会まで、信徒の皆様が教区の福音宣教活動に尽力してくださり、心から感謝いたします。教区の福音宣教はわたしたち一人ひとりの使命と仕事と責任です。

マタイ福音書では、イエスは次のように言われています。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主に願いなさい」(マタイ 9・37b-38)。

さいたま教区の福音宣教の収穫には、神の望んでおられる働き手が必要とされています。イエスが述べられたように、わたしたちは収穫の主働き手を送ってくださるようお願いしましょう。言い換えれば、さいたま教区に司祭を目指す召命の恵みを与えてくださるよう神に祈りをささげましょう。その召命の恵みをいただくに当たり、わたしたちの祈りが不可欠で、無くてはならないものです。召命は自然に出て来るものではなく、神の恵みとわたしたちの祈りから出て来るものです。

今、さいたま教区に神学生はいませんが、皆さまのお祈りによって、将来きっと神学生の誕生が出ることでしょう。誕生した神学生の養成をスムーズに行うために、準備の段階を考えなければならないのです。そのためには、皆さまのご援助がとても必要です。今年からも、新しい会員の方が一人でも増え、すでに会員である方の変わらぬご援助も増えるようにと

願っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

2022年度の「一粒の麦」の会計報告は次の通りです。

会員数：34名

献金総額：1,323,814円

教会の母であり、わたしたちの母であるマリアさまの取次によって、皆さまの上に神さまの豊かな祝福がありますように。



2022.05.30. さいたま教区司祭叙階式（安鎮亨神父）、連願中



司教按手

「一粒の麦」召命祈願ミサ

日時 2023年10月7日(土)13:00~
場所 カトリック浦和教会
司式 マリオ 山野内 倫昭 司教



発行日 2023年9月1日
発行 カトリックさいたま教区
編集責任者 飛鷹昭夫 事務局長
編集 姜玫周神父
住所 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤 6-4-12
さいたま教区事務所内
TEL 048-831-3150 FAX 048-824-3532

振込先 郵便振替口座番号 00180-0-358503
加入者名 「一粒の麦」